静岡の茶草場
CHAGUSABA

ここにしかない
ちいさないのちに
逢いにいこう

世界農業遺産を旅しよう。 #02

知的好奇心の旅

Set your travel destination to Kakegawa city.
Find plenty of reasons why in this quarterly brochure.

ここにしかない
自然に出逢いにいく

ずっと守られてきたもの

春夏秋冬、色とりどりの衣をまとう山。津々浦々、見事に装いを変える草花。日本は優美な風物にあふれている。近代化が進む今でさえそうなのだから、自然がたくさん残っていた50年前、100年前は、さぞ美しかったのだろう。

タイムトリップはできないけれど、あちこちで失われた昔ながらの景観に逢いに行くことはできる。それが静岡県掛川市の東山周辺に広がる茶草場だ。

ここには絶滅危惧種のキキョウやキンランをはじめ、300種以上の草地性植物がにぎやかに寄り添い、いのちを育んでいる。地産の茶や商品を取り扱い、地域の情報発信所でもある「東山いっぷく処」を訪ねると、地元に詳しい茶農家の方が、いろいろと教えてくれた。

「たとえば春の訪れを告げるハルリンドウは、土が湿るころに薄紫色の花を咲かせます。甘い香りのするニオ

イタチツボスミレもそうですね。マントヒヒの顔に見立て名付けられたショウジョウバカマなんてユニークな花も春先です。初夏なら絶滅危惧種のフジタイゲキが見ごろかな。静岡県内だけ、それも茶草場周辺でしか見られません。開花までに7年もかかる、ササユリの薄いピンクの花びらもキレイですよ」

多様な生物が息づく理由は、世界農業遺産に認定された茶草場農法にある。

ふつうの草刈りは、大きく成長する梅雨前に行う。しかし茶草場では、夏に成長した草花が種を落とす秋に実施。春になると、まっさらに刈り取られた地表に光がしっかりと当たり、新たないのちが芽吹く。こうして昔から自然と生物多様性が守られ、今では学者や学会が驚くほどの貴重な土地となった。

地域に3か所ある見晴らしのいいビューポイントの袖では、それぞれに多彩な草花がゆれる。子連れの親子がそれを指さし、幸せそうに微笑んでいた。

HAVE FUN HIGASHIYAMA!

知るほど楽しい、東山の魅力

カケガワフキバッタ

写真提供／遊然舎 太田峰夫

遠州を代表する二大河川、天竜川と大井川にはさまれた、ごくわずかな地域にしか生息していない希少なバッタ。羽がなく、飛べないのが特徴。静岡県の絶滅危惧種。

自然豊かな茶草場には他にも、空を舞う姿が美しいサシバ（タカ科）などの絶滅危惧種をはじめ、たくさんの生物が息づいている。

風情ある「秋の七草」

七草がゆで有名な「春の七草」は、主に食べる草花。対して「秋の七草」と呼ばれる、キキョウ、ハギ、ススキ、葛（くず）、なでしこ、オミナエシ、フジバカマは、古くから茶道や華道の席でも親しまれてきた、見て楽しむ草花。中には絶滅が危惧されているものもあるが、茶草場にはそのほとんどが生息しており、秋の風情を演出している。

その美味しさを、未来へ

芳醇な香りと、心地よい余韻を残す深い味わい。世界農業遺産に認定された「静岡の茶草場農法」でつくられたお茶は、日本一に値する農林水産大臣賞をはじめ、さまざまな賞を受賞している銘茶揃いだ。この素晴らしいお茶を買って味わうことは、貴重な農法を未来へ残すことにもつながる。通常よりひと手間かかる茶草場農法。香り高いお茶をたくさん味わって、日本の誇りを後世に残そう。

世界に一つだけのお茶

世界農業遺産「静岡の茶草場農法」

東山周辺に根付く世界農業遺産「静岡の茶草場農法」。その魅力が詳しく紹介されているパンフレットが「東山いっぷく処」はじめ各所で配布されている。ぜひ手に取って、環境と人々の暮らしが調和する農法を、茶畑を見ながら体感してみたい。

世界農業遺産「静岡の茶草場農法」リーフレット#02 [2016年発行]　発行／掛川市 お茶振興課（TEL.0537-21-1216）　制作／株式会社マツヤマ・デザイン

標高532mの粟ヶ岳、山頂まで自動車で行くことが可能
標高が上がると眼下に茶畑が広がる

農業の営みが命と自然を守ってきた

静岡の茶草場

CHAGUSABA

世界農業遺産｜静岡の茶草場農法

その景色は、その匂いは、すっと五感をすりぬけて、みずみずしい潤いを心に与えてくれる。あたりまえの命のいとなみ。それを守ってきた、あたりまえの農作業。地元の年配者は言った。「まあ、子どものころと、たいして景色は変わってないな」未来の子どもたちにも、この景色を、このすばらしさを、伝えてあげたい。見せてあげたい。日本の誇り。茶草場。ここは世界に一つだけの場所。